

令和4年度 第2回 信州幼児教育支援センター運営会議

学びの改革支援課

1. 日 時

令和4年10月27日(木) 10:00~12:00

2. 開催方法

オンライン開催

3. 参加者

【長野県立大学】健康発達学部長 太田 光洋(信州幼児教育支援センター長)

【長野県保育連盟】会長 海野 暁光

【長野県私立幼稚園・認定こども園協会】理事長 大森 けい子

【長野県野外保育連盟】理事長 内田 幸一

【長野県県民文化部】こども若者局長 野中 祥子

こども・家庭課 自然保育推進員 藤田 良子

次世代サポート課 青少年指導主事 西村 智美

【長野県教育委員会】教育次長 尾島 信久

教育政策課 主事 和泉 仁

特別支援教育課 指導主事 大日向 洋介

学びの改革支援課 課長 曾根原 好彦

指導主事 鈴木 崇晃

指導主事 百田 美希

幼児教育コーディネーター 橋爪 典子

4. 内 容

(1) 挨拶：尾島教育次長

- ・幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている。幼稚園教育要領、保育所保育指針等に基づき、各園の創意工夫を生かした質の高い教育の実践が求められている。
- ・当センターの目的は、園種を越え「オールながの」の運営体制で、幼児教育の現場を支え、幼児教育の質の向上を図ることにある。今年度は、キャリアステージに応じた研修の実施、園内研修で活用できる研修動画の充実を進めたりしながら、県内すべての園に向けて保育者の資質及び専門性の向上のための支援を重ね、幼児教育の質の向上に寄与できるよう取り組んできた。
- ・幼児教育で育まれた資質・能力を、小学校教育を通じてさらに伸ばしていくために、園と小学校の職員、両者が理解を深めていくことが重要。今年度は園小接続研修や

フィールド研修に園小接続会場を設けたりしながら、円滑な接続が実現するよう取り組んできている。

- ・本日は、本年度のセンターの取組の様子をご報告させていただき、皆様から御意見をいただくことで、今後の事業の運営の方向を明らかにしていきたいと考えている。忌憚のない御意見をいただけるよう、よろしくお願ひしたい。

(2) 協議

令和4年度信州幼児教育支援センター事業内容について

【鈴木指導主事】

○フィールド研修

- ・3回目を迎えた。園小接続会場を設け、小学校と学区の保育園を一つのグループとして研究を進めていただいている。
- ・昨年からオンラインでの研修を行ってきたが、一步前進して、新しい提案としてオンライン研修と、実際に現地視察の受け入れを行うハイブリット型で実施。
- ・各園がそれぞれ発表テーマを決めだし、具体的な保育実践をオンラインを通じて行ってもらっている。
- ・第1回、2回は各会場での研修を行い、1月のリフレクション研修では全員で一年間の研修を振り返る。
- ・オンラインで視聴するだけでなく、個別に園に視察研修の申し込みができるようになっている。
- ・第1回目の研修が、244名165園の参加。
- ・受講者アンケートでは、肯定的な回答が98～100%
- ・一方で、否定的な回答の理由として、グループ協議の時間が短いことや発表が多岐にわたり、どこに焦点を当ててよいのか分からなかったという声も。大多数の皆さんはグループ協議に満足していただいていた。グループによって、話し合いの中身の充実度が異なっていたのか。
- ・アンケート感想から、子供たちに寄り添ったり受け止めたりしたい。主体性の大切さ、連携・接続の重要性を学ぶことができた。今後に生かしていきたいこととして、日々の保育環境の見直し、小学校先生とつないでいきたい。という声があった。
- ・ドキュメンテーションを広く普及させるよう取り組んできたが、ドキュメンテーションに取り組んでみたいという意見も多かった。
- ・フィールド研修は、実践園の発表を聞いて、自園で取り組んでみて、それをまた持ち寄ってもらう往還型の研修となっており、本年度はドキュメンテーション(保育の見える化)にした形で持ち寄ってもらうこととしている。ドキュメンテーションに取り組んでもらうきっかけにもなっている。
- ・北信会場では、男性の若い保育士の先生に、うまくいったことだけでなく、悩みなど

も発表していただき、御参加の皆さんから共感いただけた。

【太田】

- ・往還型とし、実践園を拠点にネットワークを広げていくという取組である。いかがだったか。

【海野】

- ・どの園もドキュメンテーションを作る時間がなく、苦勞されている。皆さんの感想や工夫についての話し合いはあったか。

【鈴木】

- ・ドキュメンテーション研修の中で、実践園の皆さんからの発表を受け、クロストークの時間の中で「時間を生み出すのが難しい」という声があった。うちの園ではこんな時間を使って・・・という具体的な例や、より短い時間で作れるような工夫を紹介していただいている。グループ協議の中でも情報交換、情報発信できる場をこれからも作っていききたい。

【太田】

- ・できる範囲でやるのが大事。定期的に頻度を決めずにやるということから取り掛かるのもよいか。

【内田】

- ・フィールド研修がハイブリット型になったのはとてもよい。しかし、オンラインの環境が各園でどこまで整うのかという課題がある。それについての声はあるか。

【鈴木】

- ・昨年度始めた当初は大変だったが、オンライン化が進むとともに、市町村の理解も進んでいる。園にネットの環境がないという相談はなく、かなりスムーズにいくようになり、保育者のスキルアップも見られる。公立園は回線が細かったり、端末が少ないということもあるので、ここで満足せずにやっていく必要がある。

【太田】

- ・「直に見る」のと「オンラインでやる」、両方よさがある。オンラインの部分はどう支えていくかという課題があるか。

【大森】

- ・私は幼稚園の代表で、個人的な小さな保育園をやっている。年間計画で研修をチェックし、責任者+数名が研修させていただいている。保育者同士、お昼の時間に事を分担してラーニングストーリーを作り、玄関に貼って保護者に見てもらっている。フィールド研修が身についてきている。大きな園では、フィールド研修に関心がないように思う。私立幼稚園はキャリアアップの関係で独自の研修もどんどん入っているので、そちらの勉強も大変。そんな中で小さい園が研修を受けるチャンスが広がって、交流ができてるのがよい。この研修は大変勉強になっている。

【太田】

- ・キャリアアップとの関係は課題になっている。

【大森】

- ・公立の幼稚園の処遇改善について、私立園の方はかなり工夫した研修を行っているので、フィールド研修でもそんな工夫をしてほしい。

【鈴木】

- ・処遇改善について、フィールド研修はまだキャリアアップの対象になっていない。キャリアステージ研修は、処遇改善の対象になっているので、そちらで保育実践につながる研修を準備している。

○保育者研修体系の構築について

【鈴木】

- ・保育育成指標を令和3年3月に作成し、今バージョン1.3を作っている。目指したい姿18の項目それぞれに関し、専門部会でご意見いただきながら、具体的なポイント、かみ砕いた言葉を3つ挙げている。より伝わりやすい言葉を検討している。
- ・今年6つ埋め、来年度末にはすべて埋まるよう準備している。また、3つのポイントの解説、説明動画を園内研修で使っていただけるようにしている。各園30分ほどで活用いただけるシステムを作っているところ。
- ・現在、研修動画作成中だが、キャリアステージ研修も今年度からはじめた。
- ・経験年数に応じ研修を提案。
- ・様々な講師をお呼びし、充実した研修を行っている。
- ・先ほどのキャリアステージ研修は、まだすべての研修が終わっていないが、若い先生向けに早い時期に行った高山先生の研修は、子供たちにどのように接していくのか、ということについて講演と演習を2時間行った。アンケートから、分かりやすく勉強になる話だったと、センターで行った研修のなかでも、抜群に高い評価だった。
- ・子供に向けての豊かな言葉がけ、対話を生み出す保育者の関わり、保育者の関わりが子供の発達に大きく影響を与えるということ、日頃何気なくしている一つ一つの声かけを意識することを改めて見直したい、応答的な関わりを考えながら明日からの保育をしていきたいという声があった。
- ・次世代育成期（8/31）は天野先生のミドルリーダーの研修。
- ・立場、役割、ミドルリーダーとして、園内の先生方と対話、価値観の違いをつないでいくことの大切さや職員同士の対話、若い先生をうまく位置付ける、自身の立場を自覚し、明日からの保育につないでいくことの大切さを学んだという声があった。
- ・パターンランゲージ（カード）の活用についても勉強になったという声もあった。
- ・管理職期相当は元調査官の河合先生にお越しいただいた。具体的な保育の取組というより、理論的な話をしていただいた。こちらの主旨としては、園長先生に知っていてほしいことを話してもらった。

- ・コミュニケーション、環境づくりをどうしていくかというようなことについて考えられたという感想があった。
- ・キャリアアップ研修としても認定していることもあり、参加者の半分くらいは認定を申請している。処遇改善の対象になっているため、貢献できている。オンラインで参加しやすさもある。

【太田】

- ・研修体系の構築について、ご質問、ご意見等お願いしたい。

【鈴木】

- ・センターは保育の質の向上にスポットを当てている。内容面は、主に幼児教育とマネジメントに絞っている。私たちとしては、保育の質の向上に重点をおいていきたい。これ以外の難しい内容については、子供・家庭課でやっていただいていたたりしている。センターとしては特に幼児教育のところに力を入れやっていきたい。

【大森】

- ・よくわかりました。私も受けたがとてもよかった。PR が足りないと思うので、私立幼稚園の方にも PR していきたい。

【野中局長】

- ・様々な研修を各課でやっている。管理職は特にそれまでの経験があるため、それに固執しているところもある。他の人の意見も聞いた上で、自分の考えを深めていく、そういうやり方をしていく必要がある。
- ・管理職期の研修に「グループ討議少ない」という声があった。単なる講義でなく他の人のご意見を聴ける場を意識的に設けてもらうことが必要でないか。

【太田】

- ・他の園長先生と交流する機会のない、小さな地域もある。公、私の違いも。ご意見参考にしていきたい。

【内田】

- ・同意見。子育て環境、親の考え方の多様化などがある。子育てしている保護者も、体験的な遊びのことなど、みんなが豊かにもっていないことも。学校教育の中では勉強に多くの時間を費やしてきた人たちが親世代に。ばらつきがある。
- ・その環境が変化してきたことを、管理職の人たちがどこまでつかめているか。自分の過去のこと、やり方に縛られていないか、今の社会でどんな変化があり、何が問題になっているのかを敏感に感じ取る必要がある。そういうことも重点的に入れていただきたい。

【太田】

- ・若い園長先生も出てきている。主任から園長になり、仕事内容の変化に戸惑うケースも。保育の変化なども含め、盛り込んでいけたら。

【海野】

- ・マネジメントの研修などで話すとき、(スライド提示) ロバート・カツが提唱している話をする。それぞれの階層でどのようなスキルが必要か。テクニカルスキルでやってきている部分。そのテクニカルも、昭和の時代のテクニカルをそのまま使っているため、新たな時代に合っていないことも。こうしたことも考えていかなければいけないと感じているので、研修内容にも入れていただきたい。若手が上につぶされる。その原因の一つがこれかと考える。

【太田】

- ・なかなか手ごわいところなので、工夫してアプローチしていきたい。

【内田】

- ・それぞれ充実した研修だと思う。これからの幼児教育の質の向上。時代変化、テクノロジーの関係をどう扱っていくか。メディア環境と子供がどうつながっていくのか、保育としてメディアリテラシーにどうつなげていくのか。子供たちを完全に遠ざけることはできないので、令和の感覚で子供たちと考える必要がある。各ステージのところそれぞれ取り扱ってほしい。

【太田】

- ・幼児教育でどう ICT について扱っていくか、研修の中にもうまく入れていけたらいい。

【大森】

- ・乳幼児期のメディアへの接触の影響は大きいと、考えていかなければいけない。最近中学生が保育実習に来た際、ミミズについて調べた。そういう時に調べたのを見るのに使うのがいい。
- ・私立幼稚園協会では、イーセックのコーディネーター養成の研修等もある。
- ・モデル園がフィールド研修の対象園になっている。自信のある園が手を挙げているが、園長先生と主任の先生との方針が違うという園での研修があり、研修もだんだん変化している。周りの人がもっと関り、私だったらこうするなということを出し合ったりするなどして研修するのがいい。

【太田】

- ・北信の、悩んでいる先生の話に共感するという話があったが、いろんところで手を挙げてもらって、困っていることを話し合うのがよい。混沌としている変化の激しい今、いろんなことを話し合っていくことが大事。ICT を、子供がどんどん使っているという現実との向き合い方も考えていかなければならない。

○接続カリキュラム

【鈴木】

- ・園小接続は課題であると感じている。
- ・センターの取組一つとして、園小接続推進会議を実施した。各市町村が中心となって取

り組んでいくことが大切。

- ・行政の幼児教育担当課と教育委員会の担当者が別々であることが多い。両方の担当者が、2人セットで参加してもらいたいということで、呼びかけをしている。それぞれの市町村の接続に関する取組について、本年度、原村、松本市に発表いただく。後半はグループ協議とし、各市町村の取組を情報交換する予定。
- ・小学校の参加が少ないため、小学校に向け園小接続、フィールド研修の呼びかけをしている。キャリアステージの研修とは別に、本年度2つの研修を立ち上げた。園の先生と小学校の先生が一緒になって研修を行う。
- ・接続研修の報告。太田先生と作った「園小接続カリキュラム」をテキストとして研修をした。8割が園関係の方、小学校の先生は少ないが、少しずつ伸びてきている。
- ・1回目の研修では、グループ協議を設けた。朝顔という題材をもとに、園、小学校それぞれでどんな取り組みを進めているかということをお話してもらった。小学校ではこんなねらいで行っている、園でそんな活動をしているなら、小学校ではこんな風に行けるといような話をしてもらえた。
- ・2回目は、奈須先生に資質・能力をつなぐという観点から、小学校の授業改善についてお話いただいた。園の先生にとっても、改めて幼児教育の質を高めることの大切さを感じてもらえた。中学校の先生の参加もあり、園小、小中という義務教育の出口に向けて考えるきっかけとしていただけたのではないかな。

【太田】

- ・接続カリキュラム関係でいかがか。朝顔の事例、小学校だと生活科で行う。幼児期の方とは主体性の捉え方が違うというような話も。朝顔を使うのに理由はあるが、もっと自由度があってもいいのでは、ということも感じた。

【海野】

- ・先ほども話が出た ICT の活用。学校側はかなり進み、一人一端末が当たり前になっている。保育関係者がそのことを知らない。お互いがそのことを知っておかなければいけない。そこを前提とした接続ということを考えていかなければいけない。

【太田】

- ・お互いに知らないことがたくさんある。だいぶ共有できていることも増えてきたが、まだまだなところも。

【大森】

- ・小諸市で、ギガスクールで学校現場が大変な状況であると聞いている。ICT が得意な先生と苦手な先生の活用の仕方に差異。上田市では先生方への支援もあるが、全国的に見ると、進んでいないところも。

【太田】

- ・先生による差はかなりあると思う。

【曾根原課長】

- ・県内一人一台端末の整備は進めている。使うことを目的とせず、どのように使うかが重要。授業でうまく活用できる先生と、そうでない先生がいる。やれる人の授業、実践を見ていただけるように、またオンラインでも視聴できるよう検討している。命令してやれるものではないので、とびぬけてやっているところを増やしなが、だんだんと広がっていきたい。幼児期において体験をなくして ICT で置き換えるということではなく、体験を大事にしなが、記録をとったりするものとして活用してもらいたい。自分でドキュメンテーションをつくるなど、新たな提案ができるとうい。

【太田】

- ・学校ではタブレットを当たり前持ち帰っているのか。

【曾根原課長】

- ・4月時点では、持ち帰っている学校は半分。今増えてきていると思う。ルールを作らず持ち帰らせて失敗したところもあったようだ。学習に使うということを保護者と確認し、必要な時に持ち帰るという環境を作るようにしていく。

○その他

【鈴木】

- ・資料には入っていないが、市町村の園小接続の取組について。アドバイザー事業として、各園に行かせていただいたり、市町村の研修会の講師も行っている。接続の意識の高い市町村からは、何度も呼んでいただいでいて、ニーズが高い。一方で市町村の温度差、差が開いているように感じる。意識が高まっている市町村は、実践も進んできているように感じる。
- ・センターの三本柱以外に行っている活動について報告する。
- ・ドキュメンテーション研修について。今年度、フィールド研修の実践者に発表者をしていただく。フィールド研修とリンクさせなが進めている。かなり質が高まっているのを感じる。より子供の内面に踏み込んだドキュメンテーションになってきている。形をマネするだけでなく、意味のあるドキュメンテーションになってきている。
- ・小学校の先生にもドキュメンテーションを発表してもらった。小学校でも作れるのではないかと、小学校の学びを「見える化」していただいた。多くの方に参加していただいた。グラフを見ると、昨年度のステップ1から、ステップ2、3へ進んできている。
- ・申込時に書いていただいた課題として、園に広げていくこと、ドキュメンテーションそのものを知りたい、パソコンなどを使って効率よく作りたい、保護者との対話にどう使えるか、というようなニーズがあった。アンケート結果から、肯定的な意見が多い。「非常に不満」の方、選択を間違えたか。
- ・どういったものを作っているかの紹介だけでなく、どんな時間に作っているかなど、より具体的なアドバイスが見えたのではないか。
- ・今後に向けて、写真を撮るコツや、保護者や子供との対話に使ってみたい、という声があった。それに向けてどんな活用ができるか、働き方改革とも関わるが、作るものが増

えてしまうので、保育記録などと置き換えている園の取組もあった。そのような工夫についても、ドキュメンテーションとリンクさせていくような研究を進めていきたい。

- ・県内各市町村のアドバイザーの資質・能力を向上していく必要がある。連絡協議会を設ける。情報交換、悩みや迷いの共有（グループ協議）を行った。説明について、以前に聞いた話と重なるところが多いという声もあったが、新たにアドバイザーになった方を中心とした研修だったため、継続してやっていただいている方には以前聞いた話もあったかと思う。アドバイザーの役割の確認、国の動き、県の方向が分かったという声があった。
- ・塩尻市総合教育センターでの研修について。幼稚園の先生方（教諭）が参加対象。これまで小学校の生活科の講座に参加することができていたが、本年度から幼児教育に特化した講座を開かせていただいた。公私立、保育所、認定こども園など広く参加者を募った。
- ・子供の捉え、ドキュメンテーションなどについて研修を行った。養護学校の先生も参加いただいた。対面で行い、充実した研修となった。
- ・おさなごの発行をしている。
- ・「幼児教育フォーラム」2月10日予定している。フィールド研修実践園の先生方に参加していただき、具体的な取組を発表していただく。より実践的なものとしていきたい。

【太田】

- ・ご意見、ご質問をお願いしたい。

【内田】

- ・ドキュメンテーション研修が進んできたこと、嬉しい。これから深めていこうとすると、写真の撮り方などについて研修していく必要があるか。写真がどういう表現手段であるかということは、日本の教育の中になかった。ドキュメンテーションで子供の内面的なものを文章であらわすときに、写真との相関関係になる。保育者の考えと写真のリンクによって、リアリティを増す。表面的なものを撮っているわけではないということ、プロのカメラマンのような人に参加してもらい、心の中が映し出された写真になるといい。自分はもともと映像の専門なのでそう考える。

【太田】

- ・ぜひ講師として参加してほしい。

【内田】

- ・子供自身が自分のドキュメントを保存していくドキュメントファイルを持っている。自分で好きなように入れていく。一年ためていくと、その子自身のドキュメンテーションになる。年長になると、写真をプリントアウトして、コラージュにするなど自分でアルバムのように作り、ファイルに差し込んでいく。文章に書いた指導要録と全然違う効果がある。

【太田】

- ・ポートフォリオのような、曾根原課長が言っていたような、子供が自分で作っていく記録になる。

【大森】

- ・実習生の受け入れについて、養成校との連携をとっているが、昔ながらの予定や日誌を作っていく必要があるのか。私は写真を撮って、自分の読み取りなど書いていくようなことでいいのではと思うが、昔ながらの時系列にまとめられなければ…という人も。保育園の実習ではどうか。

【海野】

- ・カメラを持ってもらい、写真を撮ってまとめてもらっている。園によって違う。園ではチーム保育を行っていて、一人で子供たちを見ることはないのに、なぜ養成校ではそれを求めるのか、と思い、言っているのだが、なかなか変わらない。

【太田】

- ・記録もパソコンを使うようになってきて、前の日と同じならコピーして済んでしまう。
- ・部分実習、一日実習なら、今日はここを見るというようなことを自分で考えやっていく必要がある。

【内田】

- ・学校の方からそういう書式が求められ、時代遅れの記録を手で書かなければいけないようなものもあり、あれ？と思う。今、記録の仕方が多様になっている。そこを考えていかないと、何をやっているのか、実習生も疑問に思うのではないか。写真や動画をまとめていくことを記録の能力として、高めていく必要があるのではないか。

【太田】

- ・センターとして一つこういう形と提示するのは難しいが、こういうやり方もある、と色々なやり方を提示していくことができるのではないか。

○来年度の計画

【鈴木】

- ・予算がまだ確定していないので、予定として説明する。
- ・本年度の事業の先を見通して、この先どう発展させていくか。
- ・アドバイザー事業…現場に向けて広げていく、アドバイザーの質の向上
- ・フィールド研修、今年で3年目、実践園は15園になる。来年度5園とすると、各地区で4園できる。地域のリーダーとしてどのように働き、機能できるのかを模索。過去の実践園の皆さんに集まって検討いただくのもよいか。
- ・アドバイザーの支援力強化について。構想段階だが、スタッフ力強化していきたい。アドバイザーをやっている方は、もともと小学校に勤めていたという方が多い。幼児教育の質の向上のために、より専門的な助言を行うために、訪問支援スタッフに指導助言できるアドバイザーを置いていきたい。

- ・保育者の資質能力の向上について。キャリアステージ研修もだいぶ進んだので、中身を見直しながら進めている。
- ・幼保小の学びの接続について。フィールド研修を園・小学校に広げ、研修を進める。
- ・保護者、地域等への理解の推進（情報発信）について。「おさなご」「すこやか」、HPに情報掲示、動画もリンクしている。講演も見られるように。県内の皆様に活用していただけるような形で情報発信進めていく。

【太田】

- ・本年度の取組、新たにというところもあった。いかがか。
- ・幼児教育アドバイザーのところ、新規で充実させたいということだが、いかがか。

【海野】

- ・相模原市では、各園で相互に参観し合って、お互いに感想を言い合い、それを評価にしているという。お互いに見合って高め合っている取組。アドバイザーが支援するのもよいが、相互に見合い学び合う、感想を伝え合って高め合っていく必要がある。
- ・やま保育、野外保育など、それぞれが理解をもう少し進めていく。
- ・特別支援教育の在り方についての勧告のこと。総合教育センターでの研修に養護学校の先生が参加され、幼児教育のやり方と似ているという感想があった。個別最適化といったようなことがヒントになり、新たな長野県の教育につなげていけないか。
- ・マレーシアでは、自分のペースで教科書を進めて学習していて、とても楽しかったという声を聞いた。日本でも、デジタル教科書、ICTをうまく活用して、そんなことができるか。

【太田】

- ・フィールド研修実践園、リーダーと言っていたが、もう少し横並びの関係になるとよい。

【内田】

- ・本年度やま保育では5つくらいの園が保育を公開。今年は非常に参加希望が多い。5～6人と想定していたが、20人くらいの希望。一度に受け入れられなくて、日を分けていただいたりした。海野先生が言われるように、お互い見合っていく、見合える環境を整備していただき、園種を越えて学び合うこと具体化してもらえると動きやすくなる。

【鈴木】

- ・海野先生、実践園だったので教えていただきたい。自信がある園だけでなく、飯綱町は町全体でチームになって参加していただいている。今後地域のリーダーとして位置づいてほしい。地区で見合うというようにできるといいし、ゆくゆくは自立していただきたい。どういった形で1期生、2期生に関わっていただけるか。

【海野】

- ・とりあえず集まって話し合えば、何か出てくると思う。ここで方向性を出すよりは、そこでそれぞれにできそうなことを出し合えば、主体的に決めていける。第三者評価、公開保育に組み込んでいけないか。長野県独自の評価制度としていけないか。

【太田】

- ・最初にそれぞれの地域で集まる場を作るということでよいか。

【海野】

- ・今、コロナ禍にあって学級閉鎖を簡単にしすぎではないか。その辺のところ、どうなのか。インフルエンザと同じなのか。ここで回答は求めないが、どこかで検討してほしい。

【尾島】

- ・私たちが今どうしようか考えている。エビデンスがなく、なかなか難しい、これが悩み文科省の方も、基準を出せない。学びの継続を図りたいのは同じ。エビデンスのようなものを出せないか、色々見ていきながら、これからも取り組んでいきたいという、状況である。

【太田】

- ・保育所は、休園になったとき、代わりの園を補償してほしいという話になったが、小学校ではなかなかそれも厳しいと思う。

【事務局】

- ・連絡「長野県幼児教育協議会」について。本年度立ち上げた協議会で、園小接続に関わって、文科省小久保先生をお呼びし、幼保小架け橋プログラムについてお話しいただく。また、それぞれの取組について情報交換し、学び合う機会としたい。すでに通知を出させていただいている。またぜひ各団体でお声がけをいただきたい。